●かとう・まさと
1954年生まれ。能代市出身。能代高校卒業後上京し早稲田大学入学。1984年に脚本家となり30年間、数々の作品を創出。代表作は「日本沈没」(2006年)、「天地明察」(2012年)など。「水の中の八月」(1999年)が第39回テッサロニキ国際映画祭グランプリ、「女学生の友」(2001年)が第8回ジュネーブ国際映画祭グランプリ、「雪に願うこと」(2006年)が第18回東京国際映画祭グランプリ、「クライマーズ・ハイ」(2008年)と「孤高のメス」(2010年)で第32回、第34回日本アカデミー賞優秀脚本賞を受賞。最新作は「ふしぎな岬の物語」(2014年)。

脚本家　一般社団法人シナリオ作家協会会長
早稲田大学院客員教授
加藤 正人

秋田は米どころ

私は昭和29年、秋田県能代市で生まれた。高校を卒業して上京するまで、能代で育った。現在は東京に居を構えているが、いつも故郷のことを想っている。住民票は東京だが、心は死ぬまで秋田県人である。

秋田は米どころだ。子どもの頃から、おいしい米を食べて育った。

大学に入ったばかりの頃、学食で食べた米のまずさに驚いた記憶がある。学食の米は粗末だった。40年以上前のことだ。秋田で暮らしている時は気が付かなかったが、今まで食べていた米がいかにおいしいかということを知った。

ありがたいことに、学生時代は実家から東京の下宿に米が送られて来た。炊きたてのお米は、それだけでごちそうだ。いつも米があり、決して飢えることはなかった。だから、生活費は映画、書籍、酒に惜しげもなく注ぎ込まれた。おびただしい数の映画を見て、多くの映画の書籍を読んで、酒場で友人と映画論を闘わせた。

そのおかげで、私は好きだった映画の仕事に就くことができた。脚本家として幸せな人生を送れているのも、秋田から送られて来たお米があったからだ。

日本人の主食は米である。白米が身近になったのは大正末期から昭和の初めだと言われている。それでも、当時の日本人が毎日三食、満足に米を食べていたわけではない。戦争中も食糧事情が悪かった。私が幼い頃、時の大蔵大臣が国会で「貧乏人は麦を食え」というようなことを発言し、物議を醸したこともある。日本人の誰もが白米を食べられるようになったのは、きっと戦後になってからだろう。それほど昔のことではない。

戦争が終わって初めて作られた日本映画は「そよかぜ」という松竹作品だった。監督は平鹿郡沼館村(現横手市)出身の佐々木康さんであった。劇中歌の「リンゴの唄」は大ヒットし、国民の愛唱歌となった。

この映画は、増田町で撮影された。戦後間もない東京は満足に食べ物がなかった。秋田ロケは、スタッフに腹いっぱいご飯を食べさせてやりたいという佐々木監督の親心だったのかも知れない。

映画でりんご園の娘を演じた並木路子さんは秋田に到着して、大きな銀シャリ(白米)のおにぎりを頬張って、あまりの感動に思わず涙を流したというエピソードを聞いたことがある。増田町の真人公園には「リンゴの唄」の記念碑があり、並木路子さんの言葉が碑に刻まれている。

並木路子さんではないが、私もおいしいおにぎりを食べて、しみじみと幸せを感じることがある。

近年日本食が世界でブームになっている。築地の寿司屋でも、海外からの観光客を多く目にするようになった。ネタの良さもあるだろうが、日本の寿司の人気は米のうまさが支えているのではないだろうか。寿司に限らず、日本の食文化の基本は米だ。

私は、日本一の米どころ秋田に生を受けたことを誇りに思っている。いつまでも故郷で、おいしいお米が作られて欲しい。